The Japan Society of Educational Sociology

技術の言葉から関係の言葉へ

-校内研修における省察の言葉の変化について-

新谷　龍太朗（大阪大学大学院）

1．問題意識

荒れた学校に力のある校長が赴任して学校を立て直した事例や、民間出身の校長が新しいシステムを学校に導入した事例、または指導力のある教員の実践が紹介される事例は枚挙にいとまがないが、そうした校長や教員がその学校を出た後はどうなったのかという事例に接することは少ない。もし、そうしたカリスマ的な校長や教員を中心として優れた制度やシステムが校内に構築されても、それらが継続し機能し続けなければ、学校を通じて脈々と再生産される社会の不平等を解消することは難しいであろう。構築された制度やシステムが学校に定着するプロセスを、本報告では「学校組織文化と校内研修」に着目して捉え、フィールドワークを通じて得た知見をもとに説明する。

2．先行研究

今津（1996,pp.153-186）は、学校の内部プロセスに着目し具体的な実践的示唆を得るために、学校文化を構成する制度文化、教師文化、生徒文化を横断する形で成り立つ学校組織文化という概念を提示した。学校組織文化を「当該学校の教師の共有された行動・思考の様式で、その学校での日常の教育活動に方向性を与え、問題解決や意志決定の判断枠組みを提示するとともに、教師集団の凝集性や一体感の醸成に働きかけるもの」と定義し、「形態」「価値・行動様式」「黙示的前提」の3つの次元で見る枠組みを提示した。学校組織文化の形成と伝達が行われる場としての校内研修に着目し、黙示的前提に働きかける高度な組織学習の場となるために、教師が教育実践を省察する際に使用する言語の重要性を指摘している。また、今回の事例校が導入している「学びの共同体」の取り組みにおいても、校内研修では授業の巧拙や発問の技術などよりも、授業を観察して参観者が何を学んだかを述べ、その多様性を交流して学び合う語り口の形成が必要であるとされていた（佐藤 2006,pp.276-295）。そこで、学校組織文化の変化を校内研修における省察の言葉の変化に着目して捉えることとした。

3．調査結果

筆者は2007年5月から2009年4月にかけ、X市の公立中学校において20回のフィールドワークを行った。校内研修や公開授業の観察に加え、日常の授業の様子も観察し、教員へのインフォーマルな聞き取りも行った。また、2004年に実施された校内研修を記録したビデオを視聴した。

生徒たちの様子については、ここ数年で不登校生徒の減少という形で変化してきて

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

いるという認識をもつ教員が多かった。また、教員の様子については、「学びの共同体」のやり方にも慣れてきたが、まだ「力の入った」状態であるという教員がいた。校内研修では、「どうすればいいのか」という方法論を中心とした語りから、子どもたちが他者との関わりの中でどのように学んでいたのかという認識について交流する語りへの変化が見られた。こうした校内研修での教員の語り口について、前者を「技術 technology の言葉」、後者を「関係 relationship の言葉」と名付けた。2008年には教員が協働する感じがでてきた、という意見も聞かれ、「関係の言葉」を中心とした校内研修を重ねることが、教員の関係性にも影響を及ぼす可能性を見ることができた。それら変化をまとめたのが表1である。

表1　事例校における変化

	2004.12.24	2007.5-7	2008.10-2009.4
生徒	不登校生徒が多い	不登校生徒が減った	生徒同士の仲が良い
教師	授業のやり方について相互不干渉	力のある教員は多いが息苦しい	教員同士の仲が良い、自然体
校内研修	本音が語られない	授業の事実を元に意見を聞き合う	授業の事実を元に教員同士の交流が生まれる
省察	技術の言葉	関係の言葉	関係の言葉（自分たちの言葉）
解釈	教員の専門性が重視され、交流が進まない。	「学びの共同体」の言葉を得たが、「型」に縛られ、交流が進まない。	「学びの共同体」の言葉に習熟し、自由に使いこなせるようになり、教員同士の交流が生まれる。

表1からは、校内研修の省察の言葉の変化と対応して、教師の実践や生徒の様子も変化していることがわかる。

4．結論・考察

今回の事例から、校内研修における教師の省察の言葉の変化に伴って、生徒の様子や教師の関係など学校の様子も変化していることが確認できた。それは、それぞれの教科においてどのように教えればいいかを語る「技術の言葉」から、それぞれの生徒が他の生徒や教師との関係性の中でどのように学んでいたかという認識を共有し再構築していく上で用いられる「関係の言葉」への変化であった。統一された形態による共通体験を「関係の言葉」で語り合うことで、教師たちの黙示的前提が再構築され、お互いの価値観の交換が行われていくと考えられる。このように「関係の言葉」により教員の交流が進むことで、学校組織文化が構築されていくということが本報告における主張である。

参考文献

Bourdieu, P., 1982, Ce Que Parler Veut Dire -l' économie des èchanges linguistiques-, Librairie Arthème Fayard, (=1993,稲賀繁美訳『話すということ-言語的交換のエコノミー-』藤原書店).

今津孝次郎,1996,『変動社会の教師教育』名古屋大学出版会。

佐藤学,2006,『学校の挑戦』小学館。

Schein, E., 1999,The Corporate Culture, Jossey-Bass Inc, (=2004,金井壽宏監訳『企業文化』白桃書房）.

NII-Electronic Library Service